

ヨゼフ・フランツ・シュütte著 『ヴァリニャーノの日本布教の諸原則』

部分訳 加藤 知弘

Tomohiro Kato

JOSEF FRANZ SCHÜTTE

VALIGNANOS MISSIONS GRUNDSÄTZE FÜR JAPAN

I. BAND

I. Teil

I

ZIEL, QUELLEN UND METHODE (目的、史料、そして方法)

1. Unser Ziel (我々の目的)

(略)

2. Unsere Quellen (我々の史料)

P.15

(1) 第一にヴァリニャーノの日本における、そして日本向けの活動は、イエズス会士ルイス・フロイス(Luis Frois)が歴史的叙述と関連して述べている。

ルイス・フロイス神父(1532? ~1597)はポルトガル人、彼の郷里リスボンで王家の秘書官を勤めていたが、その後イエズス会に入会して1~2ヶ月目にインドに渡航(同じ年の1548年)、同地で修練と学習をおこなった。1554年4月中旬(イエズス会東インド管区長)ベルシオール・ヌネス・バレット神父に同行して(当時はフロイスはまだ修道士)日本に向けてゴアを旅立った。しかし途中彼はマラッカに暫く留まらなければならなくなり(教会に宣教師不在のため)、後にゴアに引き返し彼の日本行きは約8年延びることとなった。ゴアでは東インド管区長の秘書として活躍した。

ついに1562年再びフロイスは極東へ旅立つことができた。1563年7月6日日本(横瀬浦:長崎県西海町)に到着、(横瀬浦でトルレス日本布教長とともに大村純忠にたいする反乱騒ぎに巻き込まれた後度島などで布教)、1565年2月1日から(ヴィレラと交替)1576年12月31日まで五畿内で活動(織田信長の寵遇をうける)、その後豊後に戻り地区上長を勤め、1581年には通訳としてヴァリニャーノ(巡察師)に同行して五畿内を回り(ヴァリニャーノは京都で信長に謁し、後に安土城で謁見)、時の経過とともに日本準管区の Socius(準管区長補佐?)となった。1586年ガスパル・コエリユ(Gaspar Coelho)とともに都に行った。1592年10月9日ヴァリニャーノは彼の助力者としてフロイスをマカオに伴った。しかしフロイスは1595年日本に戻り、1597年7月8日長崎において死去した。

1583年以降フロイスは上司の命で日本(教会)史(編集)の仕事に従事した。彼が死去した時、その中の序論として書かれた部分(今日なお紛失したまま)と1549年から1593年に至る本編の「歴史」の215章が存在していた。最初の116章はアジュエダ博物館所蔵手書き写本を底本として、シュールハンマー(G. Schurhammer)およびフォレツェ(E. A.Voretzsch)によってド

イツ語訳され1926年に出版された。

これは「歴史編」本編の第一部をなしている。第二部については、最初の43章がジョアン・ド・アマラル・アブランシェシュ・ピント (João do Amaral Abranches Pinto) と岡本良知によって、リスボンの植民史古文書館所蔵の手書き写本原文によるポルトガル語テキストが1938年東京で出版された。ピントと岡本はその後イエズス会士アンリ・ベルナルド神父と協力して『1582年日本からローマに行った日本使節』(Tratado dos Embaixadores Japões que forão de Japão à Roma no anno de 1582)-これはフロイスの「歴史編」の中にも挿入されているが-を出版した。なお残りの部分即ち1583年～1587年にかけての54章、さらに1588年～1593年にわたる80章はこれまで活字化されていない。

1579年7月ヴァリニャーノが日本に到着した時、ルイス・フロイスは16年間の経験を通して日本の風土、民族、言語を良く知っていた。それ故フロイスは巡察師に単なる通訳としてだけでなく、彼の日本知識によって価値ある貢献をした。1579年12月のイエズス会士人物調査書 (Der Ordenskatalog) は豊後の上長として彼を記載しているし、1581年12月20日付けの同調査書では準管区長補佐 (Socius des Provinzials) として記載している。このような資格において、フロイスは日本伝導団即ち日本準管区でおこったすべての出来事について最も優れた報告をおこなっている。彼がヴァリニャーノに近い関係にあったこともこのことに役立っている。疑いもなくフロイスは、日本キリスト教団即ち準管区の内部発展についても、最も詳しく知っていた。この面から言って、フロイスの『日本史』は、我々の当面する問題点も詳細に取り扱うことができたはずである。しかし彼はほとんどそうはしなかった。そうするためには、おそらく彼は余りに近い立場に立たされていたのであろう。関連のあった人々がなお活動している間は-実際にこれらの人々は日本に於いて、マカオに於いて、インドに於いて要職にあった-それに布教の進め方について多くの問題が論議・論争されている時に、フロイスが一定の歴史的評価を与え、公表することはほとんどでできることではなかった。また実際に『日本史』(Historia de Japam) を執筆するフロイスの意図とは全く異なったことであった。『日本史』は、フロイスの書いた多くの年報と同様、報告であり信仰心を高める性格のものであった。フロイスは大きな歴史的正確さをもって、日本でしばしば全く急変する出来事を自分の経験や目撃者たちの生き生きとした証言からだけでなく、手紙や報告書から調査し、確実に追及している。

しかしそのほとんどの叙述が問題とするのは、外部での出来事-政変、軍事行動、陸や海の旅などなどであった。ただその場合日本教会や伝導団におこった外部的出来事即ち新しい修道院や教会の建設、有力な人物の改宗、公開で行われた宗教論争、キリシタンに対する迫害などもしかるべく記述されている。周囲をとりまく環境についても、フロイスは興味を覚えさせるように描くことことができたし、それは読者の興味をひくものだと彼は考えていた。これに対して、日本布教組織の内部的発展の経過については、(記述の中から) たまたま見えて来るだけである。例えばフロイスが豊後における重要な協議会について、いかに簡単にしか触れていないか、人は(他の記述と) 比べてみるができる。『日本史』は報告書としての性格とともに教化的目的を持っていた。編著者の意図するところは、単にヨーロッパの読者だけではなく、日本布教組織の中で活動している同僚たちも、この歴史書の中から学ぶべきであった。ヨーロッパの読者たちは日本に於いて見事に発揮されている熱烈な信仰心と犠牲的勇気を、日本の同僚たちは初期の伝導の使徒たちの先例、成果、後退を学ぶべきであった。これらのことはフロイスが、第二部の序文の中で明白に述べていることであるが、ただそこで問題としているの

は『日本史』がそうであるように一宣教師たちの一般的姿勢であって、例えば布教協議会やヴァリニャーノの『インド諸事要録』や『日本諸事要録』で問題となった個々の布教方法問題についての突き込んだ検討ではなかった。

この研究において、再三再四フロイスの『日本史』を引用してきたが、それは『日本史』が本来の史料的価値を有するものであり、フロイス自身我々が検討している出来事に直接関与していたからである。しかし日本布教組織と教会の内部発展（を追求する研究者）にとって、『日本史』（の記述）は全く不十分としか言えぬ。我々が何よりも基礎に置こうとしているヴァリニャーノの書簡、手稿とは全く別の価値を有するものである。

(2) フロイスの『日本史』が、日本の国家や教会の事情に優れて精通した人物によって現地で書かれたものであったに拘らず、出版されたのはやっと近代になってからであったのに対して、すでに1601年ヨーロッパにおいて包括的な布教史が出版されている。即ち『東インド、シナおよび日本両王国において聖なる福音を説くため、イエズス会の宣教師たちがなしたる布教(活動)の歴史』(Historia de las Misiones que han hecho los Religiosos de la Compañía de Jesús, para predicar el sancto Euangelio en la India Oriental, y en los Reynos de la China y Japon)で、同年スペインのイエズス会士ルイス・デ・グスマン神父(Luis de Guzman)(1544~1605)がスペインのアルカラ(デ・エナレス…マドリッドに近い古い大学都市)で出版したものである。

グスマンは新入修道会員の教師からいくつかのコレジオの院長になり、その後1588年から89年までアンダルシア管区長(Provinzial der baetischen)、1595年から1598年と1602年から1605年にはトレード管区長(Provinzial der toletanischen)を勤めた。

訳注 1543年または44年スペイン、バレンシア司教区オソルノ村生れ。アルカラ大学で学び、1563年アルカラのイエズス会修練院に入った。管区長など歴任、その間アクワビーバ総会長補佐を勤め、直接天正遣欧使節とも会っている。1605年1月10日マドリッドで死去。

彼の著作は2部に分かれている、第一部は6巻からなっており、第1巻は東インドにおけるイエズス会布教組織の設立、フランシスコ・ザビエル師(Padre Mestre Francisco Javier メストレはポルトガル語の敬称)、イエズス会の東インド布教から彼の時代まで、について述べている。第2巻、第3巻はそれらのその後の発展とザビエルの死後アジア、アフリカ、南アメリカ(ブラジル)における(布教組織の)創設について取り扱っている。第4巻は中国布教組織の端緒と形成を専ら対象としている。5巻、6巻はフランシスコ・ザビエルによる日本布教組織の創設と1565年にいたるまでの組織の変遷を描いている。

第二部は全体が日本に限られており、7巻(7巻から13巻まで)にわたって1565年から1600年までの日本布教史が述べられている。

グスマンは(この著書の記述の基礎とした)史料について、次のように述べている。すでに東インドに関して印刷発刊された著作や日本やインドにいるイエズス会宣教師の書簡などを利用しただけでなく、これらの地方に長く滞在し、それ故目撃者として精通しているいろいろの重要な人物と詳細に話し合っただけで書いたものだと。事実グスマンは日本に関する章の始めにおいて、土地や住民についての詳細な記述の中で多くの興味ある価値ある観察を集めて(紹介)しており(=5巻、1~12章)、また彼の取り扱っている時代の日本や日本布教組織でおこった歴史的諸事件について、豊富な事実を提供している。それにも拘らず、グスマンの(日本)布教

史の価値、特に我々の設定している問題にとっての意義を正しく判断するためには、次のようなことを留意しておかなければならない。第一にグスマンはフロイスなどのように、自分自身の経験から日本を知っていたのではない。それ故また彼はフロイスのように、布教史上の事件に自ら関与していたわけではない。その上彼より後のイエズス会士のように、ローマのイエズス会文書館を自由に利用できたわけでもないし、何よりも巡察師その他幹部たちの総長宛ての公式書簡を彼が読む機会がなかったことである。最後に彼の叙述はフロイスのものと同様に外部的発展を専ら追っている。このことは、ヴァリニャーノの最初の日本滞在の期間を包括した章において就中明白である。この短い期間のことについては、8巻26～40章に述べられている。

彼および彼の仕事に就いて、28～31章、33章、37～38章ではほとんど、または全く触れていない。残の章も我々の当面の課題で決定的なものである彼の活動の側面、即ち布教組織の内部的発展と布教方法の前進については、たまたま触れているにすぎない。1579年下（豊後地方を除いた九州地方）地方での第一回布教会議の簡潔な総括が最も詳細なものといえるが、そこでおこなわれた決定の実施についても、時に短く語られるだけである。

(3) 疑いもなく特に重要性を有するのは、イエズス会総長の発議で編纂された『イエズス会史』(Historia Societatis Jesu)である。その中でこの著書にとって第四部と第五部の第1巻が問題となる。第四部はイエズス会神父フランチェスコ・サッキノー (Francesco Sacchino) が編纂をした。彼はまた第五部第1巻でヨーロッパ諸国を取り扱っているが、同時代の布教史はフランス人イエズス会士ピエール・プッシーヌ (Pierre Poussines) によるものである。サッキノーは少なくとも1604年から1619年まで、従ってローマのコレジオで哲学と神学の勉学を終わるとすぐ、ローマ即ちクイリナーレの丘 (ローマの七つの丘の一つ) にある聖アンドレア修道院 (im Haus bei S.Andrea auf dem Quirinal) で歴史の執筆をおこなった。1619年から彼が死去するまで (1625年12月16日)、かれはイエズス会の秘書官であった。プッシーヌはその後かなり経った1654年になって執筆に取りかかり1661年に第五部第1巻を出版している。

『イエズス会史』の第四部は総長エヴェラルド・メルクリアン神父 (Everardo= Everhard Merkurian) の職責遂行、それ故1573年～1580年までを取り扱っており、第五部第1巻は次期総長クラウディオ・アクアヴィーヴァ神父 (Claudio Aquaviva) の指導体制時代の一部 (1581年～1590年) を取り扱っている。叙述は年代を追って進められているが、ある程度自由に書かれているところもあって、毎年イエズス会のすべて分野が必ずしも検討されているわけではない。折りにふれて、ある管区またはある布教団でのより長い年数の出来事が、一つの叙述にまとめられるのである。それにも拘らず範囲は広く、編纂者は最大限簡潔にする努力をしている。

「イエズス会の歴史」において、内部発展の諸要因を避けて通るわけにはいかない。そのことは我々の問題とも関係がある。例えば第四部2巻はポルトガルにおけるヴァリニャーノの闘いについて短く述べている。第3巻はショラン協議会 (Chorão-konsult) について述べているし、第五部第1巻は口之津協議会について報告している。(口之津) 協議会の報告ではアレシャンドゥロ・ヴァリニャーノとフランシスコ・カブラルの対立について明確に記述している。それにも拘らずこれらの叙述は単にその簡潔さのゆえだけでなく、重要な文書の明白な欠落のため我々の問題にとって不完全である。

事実編纂者が準備的な協議会 (口之津で!) について述べ (彼は誤って豊後の宣教師たちも参加したとしているが) ているのに対して、重要な豊後協議会や三ヶ所 (臼杵、安土、長崎)

でおこなわれた日本協議会を黙殺しているのは奇妙である。他の重要な文書についても全く述べていないか、ほんのついでに述べているだけである。それ故次のような事が言えよう、一般的には（布教組織の）発展の方向が見える叙述であるが、個々の出来事については折りにふれて修正が必要であるだけでなく、単に簡潔に述べるためにだけ生じたとはいえない重要な脱落があると。それで『イエズス会史』は私の著作の読者たちにとって、極めて簡単な比較（検討）を行うことを可能にするだろうが、我々が使うことのできる史料のほうが『イエズス会史』が明かにする史実よりも遥かに包括的だということを堅く心に留めて置くべきであろう。

（4）17世紀半以前イタリア（ナポリ1641年）で『東方の賢人たちとアジアの高貴なキリスト教徒の真実の歴史』（Saverio Orientale ovvero Istorie de' Cristiani illustri dell' Oriente）なる著作が出版された。これは大規模な伝記集で、第1巻日本、第2巻中国、第3巻東インドと、それぞれの地域での偉大な伝道者たちの生涯やその地のキリスト教徒の生涯をまとめようと試みたものであった。しかるに編纂者のナポリ人のイエズス会士ベルナルディーノ・ジンナーロ（Bernardino Ginnaro）がすでに1644年に死亡したので、日本に関する編のみが残ることとなった。日本に関する編は四部16冊から成っている。第一部の叙述は日本の風土・住民それに政治や教会の歴史、第二部は伝記で、日本布教の創始者（ザビエル）、高位聖職者（司教）、教団幹部、日本布教で優れた（仕事をした）イエズス会の神父、修道士。第三部は殉教、布教活動、敬虔な行状によって、特別な評価に値する日本人信者の生涯を取り扱っている。第四部は日本教会史の中の驚嘆すべき出来事や、キリスト教の敵や背教者に対する神の注目すべき懲罰を述べている。

第二部の中でアレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ巡察師の伝記に60ページを費やし、それに日本布教長フランシスコ・カブラルの分が10ページ加えられている。ジンナーロは当時の歴史家たちとは対照的に彼の個々の記述についての史料をしばしば挙げている。これらの史料の中には手書き史料も記入されている。いくつかの箇所では我々の課題に手短かに触れているが、その際新しい我々の知らない史料が明かにされるといったことはない。

（5）実際比較的短くではあるが、しばしば我々の課題とほとんど同じような問題を取り上げ、イエズス会の総長文書を自由に使えた歴史家として、イエズス会士ダニエロ・バルトリ神父（Daniello Bartoli）がいる。

ダニエロ・バルトリ神父は北イタリアのヘラーラ（Ferrara ボローニャの北東）で1608年2月12日に生まれた。1623年12月10日、ノベラーラ（Novellara）でイエズス会の（修道誓願を立てるための）修行期間に入った。彼はイエズス会ヴェネチア管区の一員として生涯を送った。パルマ（Parma ボローニャの北西）において彼は、（1626年から1629年まで）哲学と一部神学の研究を行った（少なくとも1636年の始めにはその地にいた）。時折パルマではギリシヤ・ローマの古典文学や修辞学をまた教えたりしていたし、マリア信徒会の総代としても活動した。神学研究の3年間、同時に彼はパルマ貴族学校の形而上学の補習教師（Repetitor 試験に必要な科目を復習準備させる）も勤めていた。神学研究の最後の年、つまり4年目は彼はボローニャで（36年から37年まで）研究を行うこととなった。それから彼にとっての旅の生活が始まる。評判の説教師として彼はピアチェンツァ（Piacenza パルマの北西）、マントゥア（Mantua）、モデナ（Modena パルマ・ボローニャ間）、パルマ、ボローニャそして彼の生まれ故郷ヘラーラを

訪れている。1643年7月31日、彼はピストイア (Pistoja ピサ付近) において厳粛な修道誓願を立てた。1645年ローマで彼の著書『文学の人』(Dell'Uomo di lettere) が発刊され、最初イタリア国内で、後に多くの国の言葉に翻訳され、彼は国外でも有名になった。その後間もなく(1646年)彼はイエズス会総長ビンチェンツォ・カラアファ (Vincenzo Carrafa) 神父によってローマに招かれ、そこで『イエズス会史』の編纂に献身することとなった。それ以後、彼はその死に至るまでのほとんどの期間ローマに、それも主としてイエズス誓願堂 (Professhaus im Gesù) に滞在し、また1672年には院長としてその名が記録されているローマ学院で時折暮した。1685年1月13日、永遠の都ローマで余りにも労多く、実り多い生涯を閉じた。

バルトリーは『イエズス会史』を地域ごとに、例えば国によって分けている。『アジアにおけるイエズス会史』第二部は、日本に当てられている (Il Giappone)。しかしながら、日本に置ける布教の始まり、ザビエルによる基礎づくりからコスメ・デ・トルレス (Cosme de Torres) 神父の死までは第一部アジアに収められており、3巻と8巻の全部を費やしている。第二部即ち「日本史」(Il Giappone)は、第一部の日本教会の記述と結び付いており、したがって日本布教長フランシスコ・カブラル (Francisco Cabral) から始まってイエズス会の(布教開始から)100年目で終わっているが、1640年日本におけるポルトガル使節団の英雄的死を含めている。(第二部) 1巻 'Japans' では1570年(末)から1582年(初め)までが、即ちカブラル日本布教長の教会行政時代とヴァリニャーノの第一期日本滞在が記述されている。だが布教団内部の発展については最初の日本遣欧使節団の往復の旅とヴァリニャーノ使節の豊臣秀吉への謁見に関する報告、したがって1582年から1596年までの出来事が付け加えられている。続く2巻では1582年2月のヴァリニャーノ(遣欧使節を率いての)出発に関して日本で起こったことを再び取り上げている。

本編にとっては、それ故「日本史」第1巻 (erste Buch der Japangeschichte) が特に考察の対象となる。(1660年ローマで出された) 初版本 (editio princeps) ではヴァリニャーノの第一期日本滞在に関する記述は84ページから174ページ (フォリオ版) にわたっている (ヴァリニャーノの家柄、人柄、インド巡察師への任命、ヨーロッパから日本への彼の旅について述べた序論を含めて、さらにヨーロッパへの日本使節団派遣の理由、どのようにヴァリニャーノがそれを計画したかについての叙述、対立する者たちの攻撃と歪曲された叙述について述べた結びを含めて)。(この叙述に) 先立ってカブラル指導下の日本布教団のことが記述されている。さらに174ページから242ページ (第1巻の末尾) かけては、使節団の往復についての報告が展開されている。当然の事ながら、ヴァリニャーノの日本での仕事に関する記述には、彼の仕事自身よりも時間的に範囲的に広い関連を持った多くのほかの出来事が組み込まれている。

今日我々がすぐにでも利用できる史料によって、バルトリーがローマのイエズス会文書館を大いに利用したことを示すのは容易である。このことは彼の歴史著作からだけでなく、現在も保存されている (selva) (イタリア語の文集)、即ち書き抜き集からも明かになる。この書き抜き集は、彼の歴史書のため彼自身が印刷されたり、されていない文書から—その中には多くのローマ・イエズス会文書館の手書き文書が含まれているが—集めたものである。特に彼はヴァリニャーノの第一期日本滞在にとってのいろいろな重要なこの文書館にある書簡—ヴァリニャーノからの、または他の宣教師からのもの—を利用することができた。今日まで保存されている (selva) の2巻本は、ほとんど全部がアジア布教史に関係しており、イエズス会(創立から)の全百年に—もちろん各時期おなじ程度という訳ではないが—わたって言及している。そんな

ふうなので、巡察師の最初の日本巡察期間中やその前後の時期の彼または彼の協力者の書簡が引用されているか、または要約して転載されているだけでなく、他の手書き史料、例えばヴァリニャーノの弁明書 (Apologie) などが挙げられている。特に興味深いのは、バルトリーが多くの箇所です今日失われているイエズス会総長のインドまたは日本宛て書簡の記録を内容的に転載していることであるが、残念な事にこれらの貴重な陳述が我々がこの本で問題にしている時期と一致しない事である。〈selva〉からさらに明かになることは、このイタリアの歴史家は手書き史料のほかに、多くの印刷された文献を手許に持っていたということである。単に公開された年報 (Jahresbrief やさらに新聞を通じて広められたイエズス会の仕事に対する攻撃だけでなく、すでに前述したオルランディーノ (Orlandino) とサキノーのラテン語で書かれた大部の『イエズス会史』を手許に持っていたことである。この場合、総長エヴェラルド・メルクリアン神父の職責遂行期間を含む最初の (『イエズス会史』の) 四部 (の記述) との関係が少なくとも問題となる。

『イエズス会史』の第五部 (Band I) は1661年に初版が出たので、バルトリーの『日本史』の初版 (が出て ) から一年後である。(それ故) バルトリーが彼の『日本史』(Giappone) を起草する際に、この巻の草稿に目を通したとは考え難い。(さらに) バルトリーが彼の叙述において、『イエズス会史』(Hitoria Societatis Jesu) の最初の四部にどの程度依拠したかは、両著作—それに〈selva〉をも加えるべきであろう—を厳密に比較検討することでより明かにできよう。今日我々が最早入手できないともいえる当面する問題に関する史料は、バルトリーの著作にも少ない (前述したイエズス会総長書簡記録は別にして)。それに加えて彼が取り上げた問題よりも我々の当面する問題の方が多く包括的である。しかしながら、我々が彼の叙述から目を放していいことにはならない。確かに偶然的で実際また希なことであるが、今日行方不明になってる文書を彼が挙げているし、我々の叙述と彼の叙述が乖離していれば史料的に正当性を確認すべきであるからである。

時期的にいろいろであるが、互いの因果的関連においてここで四人のフランスの歴史家を順番に取り扱うことにする。即ちイエズス会士ピエール・ド・イアリック神父 (Pierre du Iarric)、フランソア・ソリエ神父 (François Solier)、ジャン・クラッセ神父 (Jean Crasset)、ピエール・フランソア・グザヴィエ・ド・シャルルボア神父 (Pierre François Xavier de Charlevoix) である。

(6) ルイス・デ・グスマンの『布教史』は、イエズス会員ピエール・ド・イアリックの『ポルトガル・アジア教会史』3巻本の出版に刺激を与えた。それは1608年から1614年にかけて次のようなタイトルでポルドーで出版された。

『ポルトガル人の発見した他の国々と同様に東インドでおこった特に記憶さるべき事柄についての歴史、キリスト教信仰とカトリック信仰の確立と進歩：主としてイエズス会の宣教師たちが同じ目的のためになし、守り続けた原則について、彼等が東インドに入ってから1600年まで』 (Histoire des Choses plus memorables advenues tant ez Indes Orientales, que autres pais de la decouverte des Portugais, En l'Establissement & progresz de la foy Chrestienne, & Catholique: Et principalement de ce que les Religieux de la Compagnie de Jesus y ont fait, & enduré pour la mesme fin; Depuis qu'ils y sont entrez jusques l'an 1600.)。イアリックの最初の意図は

グスマンの著作をフランス語に翻訳することであった。その後彼はポルトガルのイエズス会員フェルナン・ゲレイロ (Fernao Guerreiro) と文通したが、そのことから彼はグスマンの『布教史』に対するイタリア人宣教師アルベルト・ラエルチオ (Alberto Laertio イエズス会員) の自筆の批評、さらにジョアン・デ・ルセーナ (Joao de Lucena イエズス会員) の『ザビエル伝』、1598年エヴォラ発行の『書簡集』、そして1600年以後アジアの諸布教団からの年報をゲレイロが編纂・公刊したものを、ゲレイロを通じて入手することができた。その際ゲレイロはイアリックに自分や他の神父たち、それに権威ある世俗の人々の助言として、単なるグスマンの翻訳に止まることなく、彼自身の仕事として著作をおこなうよう勧めた。すでにグスマンの翻訳をかなり進めていたイアリックはそれを中止し、送られてきた書籍や他の歴史家のものを検討し、前述の著者や他の著者それに東インド年報に依拠して彼の歴史を書くことになった。彼は著書3巻を出版したが、日本を取り扱う予定にしていたもう1巻を完成させるという望みは果たせなかった。すでにこの理由からも、さらに前述した史料の状況からも、我々の課題にとってこの著作は格別の意味を持つとは思えない。

(7) ド・イアリックの著作に日本に関する諸部が欠けていたということが、10年後イエズス会士フランソア・ソリエ神父が日本教会史を著作した主な理由である。ソリエの著書『日本諸島および諸王国における教会史』(Histoire Ecclesiastique des Isles et Royaumes du Japon) は、1627年と1629年に2巻本としてパリで出版された。ソリエ自身最初の巻で彼が史料として利用したものを挙げている。即ちイエズス会士ジョアン・デ・ルセーナの『ザビエル伝』、イエズス会士ルイス・デ・グスマンの『布教史』、1598年エヴォラで発行された『書簡集』(Cartas)、1572年パリで印刷されたイエズス会士エマヌエル・ダ・コスタ神父(Emmanuel da Costa) のラテン語の著作『アジア・イエズス会史』(Rerum a Societate Jesu in Oriente gestarum)、イエズス会士ジョバンニ・マフェイ神父(Giovanni Maffei) の『インド史』16巻、最後にイエズス会士ニコロ・オルランデーノ神父(Nicolo Orlandino) とフランシスコ・サキッノ神父の共著『イエズス会史』がある。この他にもこの著者は他の本からも時々本文に引用しているが、その一つ一つについての著者自身の説明はほとんど無い。我々の考証(の目的)からいって時期的に第一部の第五編と第六編が決定的なものであるが、それらにしても(現在進めようとしている)考証にとって独自の史料価値を有する(著作)ではないと言い得るだろう。

(8) ソリエの『教会史』は17世紀末の10年にもう一人のフランス人イエズス会士が日本の教会の歴史を新たに執筆する動機となった。1689年ジャン・クラッセ神父の『日本教会史』(Histoire de l'Eglise du Japon)が最初に出版された。最初彼はソリエの著作を一步一步辿って行くつもりでいたが、彼の先駆者の仕事には多くの箇所では不必要な詳細が多く、削るべきは削り要点をまとめていかざるを得ないことを悟った。それでもソリエの方法論のしがらみは彼にとってなお多くの重荷となった。

ソリエは年代記的に記述しているので、記述の流れを中断して各年ごとに日本のすべての諸国に眼を向けなければならなかった。クラッセはそれ故意識的に自由なソリエとはかなり異なった記述方法を選んだ。さらにクラッセの貢献は、ソリエの1624年までの歴史(記述)を17世紀中葉まで広げたことである、彼の史料については、第1巻の序文の中で述べている。ただ残念なことに、その中に手書きの史料が存在したのかどうか、もし存在したとしてもそれを何



処で入手したのか、彼の言葉からは十分に明かではない。彼は史料として、ザビエルの書簡、日本教会の幹部の公認の情報、年報、殉教者の書き残した文書、なかでもイエズス会士カルロ・スピノラ神父(Carlo Spinola)の公式に提出した報告、さらに日本で布教活動した優れた宣教師たちとその上長の覚え書きを挙げ、最後にイエズス会神父の名前、L. フロイス(L.Frois)、オルガンティーノ(Organtino)、フランシスコ・カブラル(Francisco Cabral)、アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ(Alexandro Valignano)、ペドロ・マルティンス(Pedro Martins 日本司教)、フランシスコ・パシオ(Francesco Pasio)などを列挙している。これらの史料に加えて(クラッセは)次のような史料を利用している。オルランディーンとサキッノーの共著でプッシースが補足執筆した『イエズス会史』、ニック・トリゴールの『日本における殉教者の勝利』(Le Triomphe des Martyrs du Japon)、マフェイ、イアリックそれにグスマンの著作、イエズス会士マリノ神父の「旅行記」(die Reisebeschreibung)、ルイス・ピネイロス神父(Luis Pinheiros)の『日本における迫害について』(die Verfolgungen in Japan)という著書、(1596年)2月5日(長崎二十六聖人殉教の日)を取り扱ったボランディスト(Bollandisten 17世紀ジョン・ボランドによって始められた聖人伝刊行会に属するイエズス会の学者たち)の文献、バルトリーの『アジア』および『日本』、最後に多くの筆者不明の文献やイギリス、オランダのプロテスタントの著作。

我々の研究(目的)からいうと、ソリエの場合のように第一部が考察の対象になる。だがここでもソリエに言えたことが当てはまる。我々の問題(意識)にとってクラッセの現存しているこの本は、固有の史料価値を有しない。(それどころか)逆に読者は見過ごせないいろいろな誤った主張がなされていることに、注意しなければならない。例えばクラッセは(ソリエがすでにやったように)アレシャンドゥレ・ヴァラレージオ(Alexandre Valareggio)とアレシヤンドゥロ・ヴァリニャーノを取り違え、巡察師が最初に日本を退去したのは1571年としているし、最初の日本訪問を終わった時点でメルシオール・デ・モウラ神父(Melchior de Moura)を日本管区長に指名したなどとしている。

(9) フランス人イエズス会士ピエール・フランソア-グザビエ・シャルルボアは、3巻からなる著作『日本帝国におけるキリスト教の確立、発展そして没落の歴史』(Histoire de l'Établissement, des progrès et de la decadence du Christianisme dans l'Empire du Japon)を特にクラッセとバルトリーに依拠しながら書いた。この日本教会史は1715年ルーアンで最初に出版された。第1巻は(日本におけるキリスト教布教の)最初から1576年まで、第2巻は1605年まで、第3巻は1715年までが述べられている。シャルルボアは第1巻の序文で名を挙げた二人の他に数多くの著者(の著書)を利用したと述べているが、それにも拘らずこれらの著者たちの名前を特定の箇所では記述していない。日本におけるヴァリニャーノの活動について彼がほとんど論述していないことは、この論考(の課題とするもの)にとって(彼の著書を)特別の価値のないものにしてている。

20年余後(1736年パリで)シャルルボアは『日本の歴史と全体的記述』(Histoire et Description generale du Japon)9巻を出版した。この著作はヨーロッパで印刷された日本に関する文献の全て素晴らしい研究を基礎としているが、編纂者は第9巻の最初の60ページにわたって論評を加えたこれら文献のリストを集約している。ただ重点は日本の風土、住民、政治的・軍事的発展の記述におかれており、教会史は20年前に出版された著作の全くの改訂版で、多くが削除さ

れ、多くの新しいものが書き加えられ、考証も掘り下げられたものにはなっている。記述の範囲はそれほど広げられていない。手書きの史料を研究している歴史家にとってこの著作は鋭さを欠く不備なものに止まり、それ故（我々の）当面する仕事や論考にとってこの著作にいれ込むことは益のないことである。

(10) 1710年リスボンで初版が出された著作『ゴア管区のイエズス会の神父たちによってイエス・キリスト(の愛)をかちとったアジア』(Oriente conquistado a Jesus Christo pelos Padres da Companhia da Provincia de Goa) は特別に言及するに値する。編纂者はイエズス会神父フランシスコ・デ・ソウザ(Francisco de Souza)である。彼は1648年から49年頃バイア(ブラジル)付近のイタパリカ島に生れ、1665年リスボンでイエズス会に入った。同年ポルトガルからインドに派遣され、その地に1666年から死去(1712年ゴアにて)するまで留った。その長期間、彼は教師として、宣教師として、学生監(Studienoraefekt)として、さらに上長として活動した。1697年彼は歴史著作の第一部を、1701年に第二部を完成させた。第三部は草稿のままイエズス会の禁止(ポンバル侯爵は1773年ローマ教皇の同意を得てイエズス会をポルトガルから追放した)まではリスボンの聖アンタン(S. Antao)・コレジオに保管されていたが、今日では行方知れずになっている。ソウザは彼の著述の中に希望峰から日本までのイエズス会の布教活動を包括的に含めるつもりだったので、彼の先人たちと同様著述の組み立ての難しさを経験した。

(組み立ての難しさ)を自分で解決するため、彼は彼の著作をまず第一に年代的に三部(1542~63, 1564~1585, 1586~?)に分け、次いで各部を地理的観点から多くの征服地(conquistas)(ごと)に小区分し、さらに各征服地(conquista)を時期的に2章(divisões)に分けて(述べて)いる。

ここで我々にとって考察の対象となるのは第二部(1564~1585)で、征服地の4番目で日本を取り扱っている。この征服地の第1章は1564年から1574年まで、第2章は1575年から1585年までである。(従って)後者の時期にはヴァリニャーノの最初の日本訪問の時期(nr.39~ nr.74)が含まれている。

彼の史料については、ソウザ自身第一部の「手引きとしての序文」(Prefação Isagogica)と第二部の「あらかじめの注意書き」(Advertencias Previas)で述べている。第一部の史料として彼は明確にイエズス会員ジョアン・デ・ルセーナ神父の『ザビエル伝』、イエズス会員ダニエロ・バルトリー神父の『アジア』、イエズス会員セバスティアン・ゴンサルヴェス神父(Sebastião Gonçalves)の手書きの「インド年代記」、イエズス会員マノエル・テイシェイラ神父(Manoel Teixeira)の『インド年代記』(Indienchronik)―この本のなかにはインドにおけるイエズス会の歴史についての、ヴァリニャーノから彼宛ての情報が取り入れられてる―。ソウザは彼の時代までにヨーロッパで出版された著作(ローマの史料を自由に利用できたバルトリーの他に)、なかでもテイシェイラ、さらにザビエルの列聖(カトリックで聖人の位に列すること)に関する書簡や審理(記録)も若干(!)利用したと言っている。第二部はセバスティアン・ゴンサルヴェス神父の「年代記」、ダニエロ・バルトリー神父の『アジア・シナ・日本』(Asia, Cina, Giappone)、『イエズス会史』、ゴアにおける修道会秘書官たちの手書き文書に依拠している。特に後者(修道会秘書官たちの手書き文書)は注目には値するが、しかし詳細に検討すれば、ソウザのもとに新しい史料(即ち今日文書館所蔵文書にもはや含まれていない史料)を見いだそうとする望みは大いに幻滅させられることになる。少なくとも現在我々が問題にしている時

期にとって、いやそれ以上に我々が当面している問題設定にとって、当時のイエズス会のゴア文書が極端に貧弱であるのか、そうでなければソウザの仕事が極端に不十分であるのかを示しているとは言いようがない。確かに彼は他の著者が述べていない1580～1581年の日本協議会(議事録)の内容を文書から引用しているが、最も重要な (wichtigsten)問題に限るとして21の協議事項(Preguntas)を8だけに省略している。彼の主とした史料はゴンサルヴェスの手書きのインド年代記「東インドの諸王国や諸地方に於いて、我等が聖なるカトリック信仰に異教徒を神の恩寵を以て改宗させたイエズス会の宣教師たちの歴史」(Da Historia dos Religiosos da Companhia de Jesus e do que fizeram com a divina graça na converçam dos infieis a nossa Sancta Fee Catholica, nos reinos e provincias da India Oriental)であって、1614年に完成し、今日まで唯一保存されている日本史に関係ある第一部は、1570年までを述べている。続く二つの部は章の標題だけが残されている。この標題とソウザの著作から判断すると、これら残りの部も我々の問題に就いてほとんど新しい内容を含んでいなかったようである。すでに述べたように、印刷された史料の他にイエズス会のゴア文書庫が徹底的に調査されていたとしてもである。

(11) 近世になって、ベルギーのイエズス会員ルイ・デルプラス (Louis Delplace) が短い日本教会史を書いた。彼の著作『日本に於けるカトリシズム』2巻は1909年マリーヌ (メケレン、アントワープ南の都市)、1910年ブリュッセルで出版された。デルプラスはその叙述の中に宣教師たちの書簡からの引用文をしばしば編み込んでいるが、その一部はすでに公刊されている史料集、例えば『エヴォラ版書簡集』1598年刊 (Cartas Evora 1598)からのものであるが、一部は手書きのまま保存されているドキュメントから直接翻訳されたものである。彼がそうした目的は、読者に宣教師たちのの思想を (翻訳文で伝え得る限りにおいて) 彼等自身の言葉でより確実により包括的に理解する可能性を与えるためであった。デルプラスはまた各冊 (各巻は4冊からなる) に付録としてドキュメントの翻訳や要約を付け加えている。現存する手書きの文書群からしばしば引用される書き物の故に、その限りではこの著作は評価しない訳にはいかない。それに (私の) この著述にとってなかでも第1巻第3冊は考察の対象となる。しかしそれでいながら、ここでもまた次のように付け加えざるを得ない。我々の課題とするものには表面的に触れられているだけで、我々の (必要とする) 史料もまたデルプラスの著書にはそれだけ少なくしか含まれていない。

(12) それ程広範囲なものではないが、直接第一級史料に依拠し、本来の布教者の観点から叙述されたヴァリニャーノの伝記が、イエズス会員で著名なシナ学者であるパスカレ・M・デリア神父 (Pasquale M. D'Elia) によって、「偉大な布教者たち (I grandi Missionari) 叢書」として1940年に出版された。この研究は、同じ巻の他の伝記のように、最初 (問題提起のための) 講義 (の形式) で行ったものである。

アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノの人柄、経歴、通信についての序論的資史料の後、(研究) 会議は巡察師の業績を三つのタイトルのもとに総括した。(カトリック教会の) 全路線への適応—その国の教会の確固たる確立—ローマへの結合の天才的精神。これがヴァリニャーノの布教方針を独自の大きな線で表現するであろう立面図で、彼の仕事に於いて巡察師任命の最初から死に至るまで、インド、中国、日本で堅持し続けた布教方針でもあった。ここにこの討議の価値と限界がある。

(13) 1944年ローマで出版されたヴァリニャーノのインド史に関する批判的版—イエズス会員 J. ヴィキ—神父 (J. Wicki) が出版した—についてもまた、ここで言及しておくべきであろう。(ヴァリニャーノの) 『ヒストリア』については本著述の第1巻の最後の章で取り扱ったが、その際イエズス会ローマ文書館の草稿 (現在ヴィキ—神父によって編集されている) を (研究) 対象とした。ヴィキ—の序論はかなり長く歴史家としてのヴァリニャーノを論じているが、当然のことながらこの側面について我々には興味がない。

(14) この短い文献紹介の最後に1946年リスボンで出版されたアントニオ・ロレンソ・ファリーニャ神父 (Antonio Lourenço Farinha) の極東における布教史『極東における信仰の広まり』 (A Expansão da Fé no Extremo Oriente) を挙げることにする。この歴史書は289ページから471ページ (著作の末尾) にわたって日本教会沿革史を述べている。その際もちろん日本教会史の連続的に一貫した叙述よりも、(教会) 発展の最も重要な点を対象とした歴史的洞察 (きっちりとは並べられていないが)、—その歴史的洞察は全体として一種の日本教会史を合成しているが—がより重要である。この著作は単に公刊された著作からだけでなく、草稿からも引用した多くの興味ある記述を含んでいるが、それらは概して信憑性を持つとともに不完全でもある。また残念なことに、構想の明確さや探求の熱意と叙述方法の明快さが一致していない。個々の配列がちぐはぐであり、考証も不十分である。少なからざる主張が誤っておるか不正確であるが、そのことは当然 (それ自体は) 正しい証言で (その主張を) 裏付けしようとすることになる。日本の名前は全く自己流で、誤りは珍しくない。我々の問題にとって興味ある個々の覚え書きが、この本の全性格に応じて繰り返し差し挟まれているが、覚え書きは同じくらい欠陥があり、我々の史料の範囲を越えてもいない。(原文では、wiederholt interessante Einzelbemerkungen eingestreut, die aber an den gleichen Mängeln leiden und über den Bereich unserer Quellen nicht hinausgeben. となっているが、hinausgeben は他動詞であり、意味上からも訳せないので、hinausgehen のミスプリントととして訳した。) それ故この著作にこれ以上詳細に立ち入ることは、必要ない。

### 3. Unsere Methode (我々の方法)

ヴァリニャーノの布教方針を叙述するために、幾つかの異なる道が我々の前に開かれている。我々が総合的と呼ぶことのできる第一の道は、なかならずヴァリニャーノの方法の全体像を眼中に置くこと、そして彼の「漸次的解明と変化」(Allmähliche Klärung und Wandlung) なるものを追究すること、個々の布教原則がばらばらにされるのではなくて、巡察師の全意志の脈絡の中で観察されること、に存在する。我々が分析的方法と特徴づけることのできる第二の道は個々の布教規範それ自身を、全体的展開を特に顧慮することなく、探求することである。全体像の考察の際、個々の問題にも広い (考察の) 余地が認められるにしろ、個々の問題の分析的探求の際に特別の数章を設けて (全体的) 展望が与えられるにしろ、前述の二つの方法のコンビネーションも可能である。

すべてこれらの方法は、利点と欠点を持っている。総合的方法は、その主題からヴァリニャーノの性格と意志の全体性を保持するものであり、その目標からは問題の全体、そして全体の光の中で初めて個々の問題を考察することになるから、最も多くを満足させるものである。確

かにその際、必要な明晰さを持続しようとするならば、折りにふれての繰り返しを避けることは必ずしも容易ではない。分析的方法は、個々の規範の明確な論述では他に優るものであるが、それは問題性と人物の全体像を見失わせることがある。

ここでは我々にとっては、まず（教会の）全体の発展の探求が重要であるので、総合的方法を選ぶことにする。その際、もちろん個々の問題での進歩も時に応じて示すことにする。全著述を終えた後、この総合的叙述と並んで個々の問題の分析的叙述が望ましいものであることが示されたとすれば、本著作がそのための道を準備したことになる。